

ヘンリ・ジェイムズのノートブックの紹介

佐 野 英 一

ヘンリ・ジェイムズは死ぬ前に多くの手紙や草稿を破棄して行つた。それでも、ここに紹介しようとする本の元となつた創作用ノートブック九冊と、ほかに、いくらかの家族に関する書類とが残つており、それらは一括して、小説家の甥で現存するヘンリ・ジェイムズ氏により、ハーヴァード大学のホートン (Houghton)・ライブラリに寄託された。

ハーヴァード大学の二人の教授 E・O・マシーセン (Matthiessen) とケネス・B・マードック (Kenneth B. Murdock) 氏——このうち前者は既に故人——の編纂になる *The Notebooks of Henry James* が Oxford University Press, New York, Inc. から一九四七年に出版された時には、定価が六ドル位、邦貨二千何百円という全くの特殊出版物であつた。それが昨年 (一九五五年)、ニューヨークの George Braziller, Inc. から三ドル九十五セントとなつて、再び出版

されたのである。これでもまだ貧乏書生には高いけれども、少しは、ジェイムズの小説を深く調べようと思うものに、有がたいといわねばならない。

このような公表を目的としない書き物が本になつた場合には、普通の小説や詩などを批評するように、原筆者ヘンリ・ジェイムズの書いた部分を対象にして、面白いとか面白くないとか、すぐれているとかいえないとか言つて、批評し去るわけにはいかない。むしろ、編者の編集ぶりが行き届いていて読者に親切であるかどうか、編者が編集するにあつて持つていた用意周到さ、学識の深さや文学的センス、が問題になると思うのだが、二人の地位や過去の業績からいつて、まず問題はないと言えよう。

実際にどの位の親切さが加えられているか、その一端を紹介すると、ある作品の想案が一つ書きつけられると、編者は

必ず直ちに、これは発表された何々と題する小説の萌芽だと教えてくれる。この覚え書きと、実際に書き上げられた小説との相違点もしばしば指摘している。(だから、小説の梗概は可なり教えられる所がある。)そのような解説のなかで度々引用されるのは、一九〇七—一九一七年に出た二十六巻のニューヨーク版ジェイムズ全集に作者自身が附けた各巻への序文と、もう一つは、ジェイムズの書簡のなかの文句である。

それ故、この本は、パーシ・ラボック編「ヘンリー・ジェイムズ書簡集」(*The Letters of Henry James*, ed. by Percy Lubbock, New York: Scribner's, 1920) と、ニューヨーク版全集の回想的序文と相まつて、ジェイムズ作品研究の参考書の三幅対をなすものである。

この創作日記の書きつけられた期間は、一八七八年十一月七日から一九一一年五月十日までである。だからこの期間以前の「ロデリック・ハドソン」や「アメリカ人」などという初期の作品のことは出て来ない。前後三十三年に亘る日記であるけれども、小説の材料になりそうな話を聞いたり、小説の構想に苦勞したりした時だけ書いてるので、日附はほとんど飛んでおり、日附なしの記入の箇所も多い。

最初が、今はあまり重要視されず、作者自身にも不満の作であつた「信頼」(一八八〇年)という長編ないし中編の可なり詳しいメモであり、最後が、ものにならなかつたらしい構想の練り直しの記録に終つてゐる。このようにしてこのノ―

トブックに現われる小説の萌芽の数は、書き上げられたものの、長編短編さまざまのものを合せて八十以上、小説にならずに構想だけに終つたものの三十ないし四十篇、とは編集者の緒論の伝えるところである。

次に拙訳で示す一例は、名作「婦人の肖像」を執筆中、この先をどう処理しようかと思索しているところの一節である。

「婦人の肖像」

イザベルが結婚したあと、もう五回

分だけ書かねばならぬ。全篇の成功はこの部分の処理の巧拙にかかるところが大きいから、以後を極度に大切にやりたい——想像力を最もよく働かせたいものだ。初めのほうに行動が不足しているのを、ここで補うことになる。残っている諸要素はそれ自体がたいへん面白いものだと思うから、必要なのはただ、それらを強力に、みごとに組み合わせることだ。物語全体の弱点は、それがもつぱら心理的でありすぎること、事件に依存するところが少なすぎるということにあるのだが、それにもかかわらず、イザベルの結婚によつて生じた設定情況を全部展開すれば、充分に劇的なものになるう。自由を夢み、高潔さを夢み、自分では立派な、自然な、明察的なことをしたとばかり信じている女が、気の毒にも、実際には、因襲も因襲、それこそひどい因襲的なものの犠き白のなかで衝き碎かれる自分自身を発見す

る、というのがこの一篇の狙いである。結婚生活を一年か二年しているあいだに、彼女とオズモンドとの性質の敵対が現われて来る——気高い性格と狭陋な性格との正面衝突だ。ここでは少ない紙幅に多くのことが盛られるから、一語一語が利いていなければならぬ、一触一触が有意義でなければならぬ。残りの五回分が立て混んだものに見えるようになって、初めの部分が分散的になりすぎているから、かえつて良い欠点となろう。イザベルは自己の甘い思い違いから目覚める——ああ、この思い違いを自然なものにするには何という技巧が必要であつたことだろう！——目覚めてみると、より寛宏な自身の美質に対して憎悪を抱くに至つてゐる夫と直面している。これらの事實は、しかしながら、それだけでは充分ではない。設定情況は幾つかの重要な事件の成行きによつて特色づけねばならない。そのような一つの事件は、オズモンドとマール夫人とのあいだに存在していた関係の発見、彼女はマール夫人の情夫と結婚してしまつたことの発見、である。一言にしていえばマール夫人はパンジの母親なのだ。

このように引用してみても、「婦人の肖像」を読んでいないものにとつては少しも面白くないであろう。事実この本は、自分の読んだ作品に関する部分はこの上なく面白く読めるが、そうでない部分は、大かたはチンプンカンプン、何の

ことやら分らない、という種類の本なのである。幸い私は一、二年前から漫然とではあるが、街に得られるジュエイズの作品を、小さなものまで合せれば二十篇以上読んでいたから、この四百頁にあまる創作ノートがやつと通読できた。あの渾然たる大作「婦人の肖像」が、途中でこのような苦心が払われつつ書かれたのかと思うと、興味津々たるものがある。しかし、まだ読んでいない作品の草案でも、面白く読めるものが全然ないわけではない。次に示す「大きな条件」(一九九九年)という短篇のノートがその例である。

「一八」一九九九年二月十日。ラム・ハウスにて。

親愛なる老ジョージ・メレディスが先日(五日、日曜日ボックスヒルにおいて)小さな題材——五千語ぐらい——を暗示するような言葉を(自分に、ある事を話しているあいだに)ふと言つた。ある女が自分のことをあまり知らない男と結婚しようとしていた。男は女を恋していた——激しく。だが、女の過去について何かが見われて来た。「一体それは何ですか。何かあるんですか——僕が当然知つて置かねばいけないことが、何か……?」「六カ月待つて下さい」と女は答える。「六カ月たつてもまだあなたがそれを知りたいとお思ひになるようでしたら、その時はきつとそれをお話しますとわたくしはお約束致しますわ。」メレディスの言葉というのはたつたこれだけ。だが、これは、立ち

どころに、自分にハンカチに結び目を作らせた。まさに小さな題材がある——あるにはあるが、何だろう？ 自分には色々な可能性が見えてくるような気がする。とにかく、これは皮肉の色の濃いものに自分には思える。「一番はつきり見えてくるのは次のようなものだ。」

女は過去があつたかもしれない女、ある年齢の、あるタイプの女だ。要するに、この女に向かつて迫りつつある男、結婚申込みをして、女がそれを受け入れた男、にとつて、その疑念、その可能性、その想念が起つてくるのだ。そこからして、今引用した問答となる。女は男を恋していない——別の男、即ち男の友人を恋している。ところで、男は女の条件をとて容れられないと知る。

「まずそれを話して下さい。たいして影響のあることじやないのでしよう。僕は構わないんです。ただ知りたいだけです。話して下さいもいいはずだ。ほんとに何の影響もないことだと思つていらつしやるのなら、どうしてそれが話せないんです？」

「でも、お話できませんわ。お話したくありませんわ。ええ、あなたと結婚します。あなたにふさわしい妻になれると信じていますわ。でもこれくらいは信頼して下さいならなければ。わたくし誓います、六カ月たつてもまだ知りたいとお思ひになるようでしたら——」

「その頃には僕はあなたと結婚してるじやありませんか。」

「そうです、でも、そのためにその時あなたに何か損なことが起つてしまして？」

「僕が知りたいと思わなくなつてれば、とおつしやるのでしよう？」

「それもありますけれど、たとえ知りたひと思つてらしつても同じです。現在のわたくしを思つていて下さるのなら——」

「その時だつてあなたを僕が思つているだろう、とおつしやるのでしよう。——もし何か大へんに悪いことだつたら——大へん悪いことじやないんですか。」

「それは、あなたがどうお思ひになるかはわたしには分かりませんわ。それがどうしても分らなければいけないのなら、内容があなたに知れた時に決めて下さい。あなたにどううい感じを与えるかはわたくしには分かりません。」

まだこの先がこの三倍もあるから、以下私の言葉にして、かいつまんで伝える。

男が女の出した条件に迷つてゐるあいだに第二の男、即ち男の友人が、その条件を呑んで女と結婚してしまい、至極幸福そうな結婚生活を送る。男がやつて行つて、「もう彼に告げましたか」ときく。「いいえ。」「彼は聞きたがらないんですか。」「ちつとも。あなただつてそうだつたでしようよ。」「もう僕には話して下さいもよいでしよう。」「とても駄目で

す。「彼にしやべるだろうと心配しているのではありませんか?」「いえ。彼はあなたにしやべらせなどしないでしょう。」

また暫くして男は女のもとにやつて行き、種々手をつくして過去を調べても何も出て来ないが、一体何でした、いつ頃のことでしたか、と問いつめる。女は他言をしないと厳そかに誓わせた上で、実はそんな打明けねばならぬような過去は何一つ無かつたのだという。

「もし僕が知らせてくれと言つたらどう答えるつもりでした?」

「何にも。だつて、知りたがりはなさらなかつたと思うわ。」

「そんなことはありませんよ。」

「じゃあ、ナッシングがあつた、何もありません、というだけでしたわ。」

「僕に、さも何か悪いことがあるように思わせておこうとなすつたのですね。」

「そうです。それがあなたの罰です。」

現在のこの女の夫である自分の友人は、おほらかに振舞つて、妻の過去のことを問いただしもしないで恩恵を施している満足感に、結婚生活を二重に幸福にしているのだと氣附いて、今さらながら男は嫉妬にかきむしられるのだつた。

一八九九年といえは、ジェイムズの英文はもう可なり晦渋になつてゐる頃であるから、編者の解説によると、これは完

成されて同年の「アングロ・サクソン評論」に載り、女はチルバー夫人、男はブラドルとなつてゐるのだそうだが、完成作品のほうがかえつて読みづらいのではないかという氣がする。

ああ、祝福されたる「他の家」よ、あれがこうして、一歩ごとに先例、支援、足もとを照らす神のような灯を提供してくれる。(Oh, blest *Other House*, which gives me thus at every step a precedent, a support, a divine little light to walk by.)

とか、

涙なくしては考えられない昔のやり方で、物ごとを思い浮かぶにしたがつて書きつけ、そのあいだに少しずつでも、揺らめく針、跳り出す編み目が、姿を編み出してゆくようにしたい。(Let me, in the old way that I can't think of without tears, scribble things as they come to me, while little by little the wandering needle and the wild stitch makes the figure.)

などという、晩年になつて、若かつた頃の旺盛な創作力をなつかしんだ記録は、このノートブックをしてやはり一つの間記録たらしめる支えとなる少量の薬味である。前者は一九一〇年六十七歳になつて五十三歳の時発表になつた小説 *The*

(以下六五頁へつづく)

「泣き、笑い、そして又泣いた。類例のない程興奮していた。この話を考えながら、人の寝静つたロンドン⁽¹⁾の街を、毎夜々々十五マイルも二十マイルも歩き廻つた」⁽²⁾と云う。この興奮は、彼の中に於ける温い心と、冷い心との相剋が生み出したものではなかつたろうか。スクルージが、夢を見て改心した所で、クリスマスが過ぎれば又、冷厳な世間と、今迄の彼の閉された心とが再び戻つて来るに違ひないことを、ディケンズは承知していたのであらう。

前述したように、クリスマス物語以後のディケンズの小説は次第に陰翳の度を加えて行つた。それは、若い生命力に支えられて、強いて人生を明るく見ようと努めていたディケンズが、一転して、自分自身と世の中とをありの儘に見ようと腰を据えたことを示すものであり、そして又不幸な家庭生活から、捨身になつて求めた晩夏の恋の、期待外れの苦さによつて教えられた、人の力の限度の自覺の現れでもあつたであらう。

註① André Maurois : *An Essay on Dickens*, Chap. IV.

② John Forster : *The Life of Charles Dickens*, Bk I, Chap. iii.

③ Edmund Wilson : *The Wound and the Bow*, "Dickens" V.

④ *David Copperfield* : Chap XLIV.

⑤ *ibid.*, LIII.

⑥ John Forster : *The Life of Charles Dickens*, Bk VII, Chap. ii.

⑦ W. Somerset Maugham : *Ten Novels and Their Authors*, "Charles Dickens and *David Copperfield*".

⑧ *Household Words*, June 12, 1858.

⑨ John Forster : *The Life of Charles Dickens*, Bk XII, Chap. i. (本学助教授)

(七〇頁以下)

Other House (1896) へ言及したもの、後者は一九〇〇年、未完のまゝ残された *The Sense of the Past* 創作中に洩らされた言葉である。

ところでここに次のような名前の羅列が出て来る。小説に使えそうな氣に入つた名前を書きとめて置いたものだ。

Names. Beague—Vena (Xtian name)—Doreen(ditto)
—Passmore—Trafford—Norval—Lancelot—Vyner—
Bygrave—Husson—Domville—Wynter—Vanneck—
Bygone—Bigwood(place)—Zambra—Negretti—Messer—
Concher—Croucher—Woodwell—Chamley—Dann—
Dane—Anderton (place)—Hamilton-finch (or with
other short second name)—Byng—Bing—Bing-Bing—
Oldfield—Briant—Dencombe—Tyrryl—Desborough—
Morland—Bradbury—Messenden—Ashington—Jowel—
Billamore—Winddle—Chiddle—Vernham—Illidge—
Tertius (Xn. name)—Poynton—Monmouth.

シャイムズ⁽¹⁾の愛読者は、これらのなかに、時に旧知の名を見いだして、微笑するのである。(本学教授)